

令和2年度

「地域における青少年の国際交流推進事業」

「信州グローバルセミナー2020」 成果報告書



長野県教育委員会

1. 事業概要

(1) プログラム概要

ハーバード大学、コロンビア大学など最先端の教育を提供する大学に在籍し、様々な国籍や背景を有する大学生・大学院生（以下、「海外大学生」と）と、長野県小布施町と協働し、全国から集まった13名の高校生（うち2名は長野県内在住）を対象とした4日間の「オンライン小布施ウィンタースクール2020（以下、ウィンタースクール）」を実施した。

(2) 実施内容

期間中、高校生は海外大学生から専攻する学問領域やその生き方について英語で学ぶ少人数講義（セミナー）や様々な分野の第一線で活躍する社会人からの講演会（フォーラム）、自分自身の将来像を描くワークショップ、地域の文化体験など、グローバル・ローカル双方の視点や価値観を学ぶことができる多様な取組を体験した。

2. 成果について（概要）

これらの取組を通して、参加高校生には意識の変容が見られ、その状況は、参与観察や事前・事後アンケートの実施により確認できた（アンケートの結果については後述）。目的に対する成果は次のとおりである。

- (1) 「自分自身のやりたいこと、あるべき姿を追求し、主体的な進路選択を行うことができる人材を育成する」という目的に対し、大学生や講師から、経験に基づく話を具体的に聞くことにより、自分自身のやりたいことを明確化し、主体的に進路選択する意識を高めることができた。
- (2) 「グローバルな視点を持ちながらも地域で活躍する人材や、日本の地域における価値観や課題を知り、愛着を持ちながらも、グ

ローバルに活躍する人材を育成する」という目的に対し、それぞれの参加者が、自分の住む地域の価値観や課題を知り、理解するなかで、自分の可能性を広げたり、日本人として世界に貢献したいという考えにつながることができた。

- (3) 「グローバルな視点を持った上で、社会や身の回りにある課題に対する具体的な行動を起こす人材を育成する」という目的に対して、多様な価値観を肌で感じ、自分の環境を相対化し、他者に対する想像力を持つ中で、それぞれが抱える課題を見出し、具体的な行動に向け決意を持つことができた。また、本事業は高校生を中心とした取組であるが、メンター役として参加した海外大学生及び日本人大学生にも、運営を通して人材育成に繋がる意識の向上が見られた。



事前の意気込みを述べる大学生運営委員

3. 具体的な事業内容

(1) 計画・実施したプログラム

「小布施ウィンタースクール2020」

期間：

12月26日（土）～12月29日（火）

会場：

オンライン（Zoomを活用）

参加者数：

高校生 13人（長野県内高校生2人）

大学生 35人（海外14人、国内21人）

主な内容：

- ・海外大学生によるセミナー
(英語による授業)
- ・社会人講師によるフォーラム
(講演会)
- ・フリーインタラクション
(社会人講師との自由な対話の時間)
- ・リフレクション
(1日の活動を振り返るグループ対話)
- ・ワークショップ
(大学生が企画する体験的学習)



(2)実施経過

①1日目 12月26日(土)

参加高校生は全国からオンラインで集合し、大学生に迎えられたのち、開会式に参加し、主催者である長野県教育委員会、共催者である小布施町長が挨拶を行った。運営委員長の大学生と海外大学生代表によるスピーチに耳を傾け、皆がこれからの4日間に思いを馳せた。

開会式後、プログラム中に行動を共にする「ハウス※」メンバーの仲を深める「アイスブレイク」で自己紹介はもちろん、協力してクイズに答えたり、オンライン越しにダンスをしたりすることで、オンラインでも初対面の者同士が打ち解ける雰囲気を作ることができた。

また、昼食時には「おぶせラジオ」という企画を通じて、高校生は大学生に自由に質問した。大学生たちのフリートークにスタンプやコメント、発言などで反応することで相互理解を深めた。

午後は、「小布施ワークショップ」を開いた。事前に郵送した小布施の特産品を食べながら、小布施の方のお話や、大学生委員が作成したオリジナルムービーの視聴を通じて、小布施の歴史や取組について深く理解した。さらに、オリジナルの小布施マスコットキャラクターを作成し発表することで、表面的な理解に止まらず小布施に対する愛着を抱いた。

高校生がデザインした小布施町のマスコットキャラクター



夕方は、「自己分析ワークショップ」を開いた。ここでは、ライフチャートの作成を通じてこれまでの人生について振り返るだけでなく、仲間のライフチャートについて対話することで、過去も含めた相互理解が可能となった。

夜は、ハウスごとにその日に感じたことを振り返りながら自分の抱えている不安や今後の目標などについて話す時間(以下、リフレクション)を設けた。落ち着いた雰囲気の中、高校生はどのようなことでも話すことができ、その場で大学生からの意見をもらった。リフレクションはウィンタースクールの根幹をなすため、期間中毎晩行われた。



ライブチャートの例

※「ハウス」…期間中、高校生と大学生からなる行動班。多くの時間を共にし、1日の学びや個々の過去を振り返る中で年齢や出身に関係なくお互いの考えや想いを共有する。少人数だからこそ密な交流が生まれる場であり、プログラム後も続く暖かい繋がりをつくる仕組みである。



ハウスごとの記念写真

② 2日目 12月27日(日)

午前からは「セミナー」がスタートした。今年度のセミナーの内容は以下の通りである。

1. Stable Matching
2. The language of flowers
3. Introduction to Globalization
4. Hospitality
5. Science (non)Fiction
6. The Science of Happiness
7. Game design and Storytelling
8. Persuasive Communication
9. What is Normal?
10. Cultivating Empathy
11. Philosophy & The Good Life
12. Being the Best You
13. Medicine vs Viruses
14. Racial and Ethnic Relations in the United States

分野は多種多様で、高校生は自分の希望するセミナーを事前に選択して受講する。セミナーは、3日目・4日目の午前にも実施され、理系・文系に留まらないリベラルアーツの根幹となる取組である。オンラインではあったが、英語を用いたセミナーを通じて海外大学生講師との異文化交流を試みたり、英語での議論に積極的に参加したりする姿勢が見られた。

昼食時の「おぶセラジオ」では、初日の「小布施ワークショップ」を活かし、各参加者の出身地域について語り合った。日本国内だけでなく海外も含めたバックグラウンドの多様性を実感するとともに、各地の歴史や取り組みに興味を持つきっかけとなった。

午後は、高校生、大学生が膝を交え、仕事観から人生観まで双方向の対話を行う「フリーインタラクション」を実施した。この企画では、自由な交流を図る中で高校生は積極的に質問し、熱心に講演者の方々の話に聞き入っていた。社会の最前線で活躍する人々との交流を通し、人生には多様な選択肢があることを知り、高校生が新たな視点や価値観を得る機会となった。

〈フリーインタラクションゲスト〉

- 阿曾沼 陽登 氏
(陽向舎 代表・Global Shapers)
- 大宮 透 氏
(小布施町総務課長・総合政策推進室長)
- 中川 剛之 氏
(三菱商事)
- 林 志洋氏
(小布施町)
- 渡辺 麻由 氏
(トビタテ！留学 JAPAN 事務局)

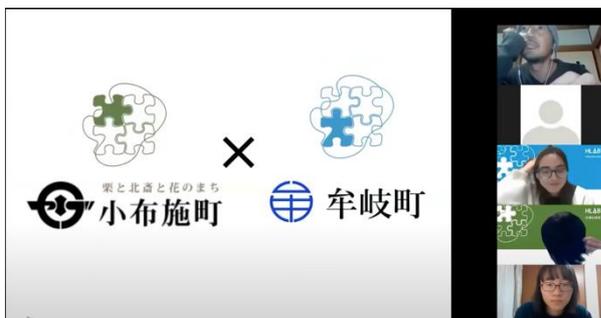
〈フリーインタラクションの感想〉

「自分の将来に対する「一般的」な見解が全てではないことを教えてくれた。」
(参加高校生)

夕方には、社会の最前線で活躍している方の話を聴き、自分の将来に生かすための「フォーラム」が行われた。HLAB TOKUSHIMA と合同の企画で、高校生たちは講演を聞く前に交流を行い、HLAB OBUSE 内だけでなく HLAB TOKUSHIMA の高校生たちからも刺激を受けていた。講師の塚越 暁氏は自身が経てきた様々な経験を通して感じたことや気づき、そして「好きなことを選べ」という心強いメッセージを

述べ、高校生たちは熱心に講演を聞き、受験や進学を越えて自分がどう生きたいか、人生において何を大切にしたいか、という議論も巻き起こった。

夜には参加者同士が気軽に語り合える「Coffee Chat」が開かれた。任意参加ではあったが、多くの高校生が参加し、普段の生活での悩みや進路の相談、大学生の専攻についてなど様々なことについて語り合った。



HLAB TOKUSHIMA と合同でのフォーラムの様子

③ 3日目 12月28日(月)

高校生もオンラインでのプログラムに慣れ、午前のセミナーでも楽しんでディスカッションに参加する様子が見られた。積極的な姿勢は午後の企画でも多く見られた。

昼食時の「おぶせラジオ」は、高校生が主体となって番組を企画し運営した。高校生がトピックを用意し、他の高校生や大学生に話を振るリレー形式で、全員がお互いのことを楽しく理解することができ、仲が深まった。これをきっかけに、高校生が主体的に行動するようになった。



高校生がラジオ運営をする様子

午後は、「自己分析ワークショップ2」を開いた。ここでは高校生2人と大学生2人がグループとなり、事前に用意した自分に関する質問と答えをもとに相互に質問していく形式で自己理解が促された。高校生たちは、自分の経験と自分の考えや価値観とのつながりを紐解くことができた。

夕方は、「大学生フリーインタラクティブ」を開いた。大学生2人と高校生1人でグループになり、進路選択や大学生活、将来の夢や留学について語り合った。高校生は、大学生の高校生時代の葛藤や悩み、決意などを聞き、大学生の新たな一面を発見していた。また、具体的な大学受験や留学の相談も行っていた。この後、任意参加の「Coffee Chat」を開催し、「大学生フリーインタラクティブ」で話しきれなかった話題や相手と対話を続ける高校生も多かった。

< 高校生の感想 >

- ・いろいろな大学生からいろいろな経験を聞いて自分がこれからどうすればいいかちょっと分かった気がする。
- ・大学生メンターの皆さんと留学や海外進学について話した時、今まで考えたことのない道を考えられた。

④ 4日目 12月29日(火)

最終日の午前には、セミナー最終日としてまとめの授業を行い、プレゼンテーションをするセミナーがあるなど、期間中での学びを総括する時間になった。

昼食時の「おぶせラジオ」は、3日目と同様に高校生が主体となって運営した。前回よりも多くの高校生が運営に参加し、ラジオのパーソナリティーとして大学生への質問を回した。大学生メンターはどんな高校生活を送っていたのか、なぜ今の大学にしたのか、という高校生にとって、将来の参考となる質問が多く寄せられた。

午後は、最後の自己分析ワークショップとして「クリエイティブワークショップ」を行った。ここでは、ウィンタースクール中に感情が動いた瞬間を書き出し、そこから自分についての発見をし、それを未来でも大切にしたい WILL として言語化を行った。難しいお題ではあったが、高校生たちは自分の WILL を大学生と対話しながら見つけていった。最後に、その WILL をピクトグラムとして絵で表現した。高校生たちは思い思いに絵に WILL

を込めて製作し、できたものを共有することで互いの WILL を当てるゲームを行った。楽しみながら自分の大切にしたいものを表現し、皆に共有するという一連のアウトプットを通じて、自分の未来に対して前向きになる姿が見られた。

夕方は、小布施町長、小布施町議会議長らが出席して閉会式を行った。町長からの挨拶、代表の海外大学生らからのスピーチの後、4日間の様子をまとめたエンディングムービーを見て、「自分は何を感じ、何を得たのか」を認識し全日程を振り返った。高校生に感想を尋ねる時間も設定し、振り返って涙する人や積極的に想いを発言する人、仲間への感謝を伝える人などが見られた。高校生が大学生への感謝を紙に書いて見せ、企画をのっとるといような高校生から大学生へのサプライズも見られた。閉会式の最後には、各ハウスの大学生から高校生一人一人に修了証が贈られた。

高校生は大学生に見送られ、感動や寂しさの涙をこぼしながら別れを惜しむ姿も見られた。コミュニケーションツールとして使用していた Slack 上では、以下のような感想を伝え合う姿も見られ、別れを惜しみながらも今後も続く関係性を確信し、オンラインプログラムは幕を閉じた。

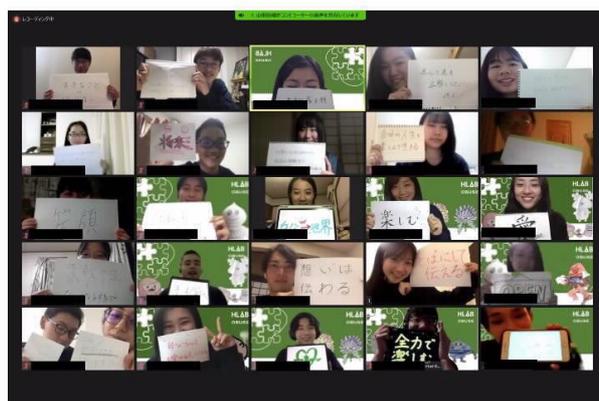
〈閉会式感想〉

「本当に参加できて、みんなに出会えたことが嬉しいです！私は小布施に住んでいるのでいつでもみんなを待っています。4月から大学生になって運営に関わりたいと思っているので、また帰ってきます！みんなまた、会おうね。」

(小布施町民の参加高校生)

「本当に毎日刺激的で充実した4日間でした！みんなと出会えて本当によかったし、これで終わりにしたくないので、絶対また話しましょう！！ありがとうございました。」

(参加高校生)



閉会式で今後の宣言をする参加者の様子

(3) 事後報告会の実施

日時：3月6日(土) 18:00~20:00

会場：オンライン (Zoomを活用)

参加：25名 (高校生・大学生)

内容：

- ・小布施ウィンタースクール 2020 実施概要の説明
- ・参加高校生によるスピーチ
- ・参加高校生による質疑応答
- ・参加大学生によるスピーチ

4. 事業成果について

事業成果については、要項に定められたアンケート項目の他に、独自に参加者へのウィンタースクール参加前後に実施したアンケートにより4段階評価で計測した。

以下は、アンケート結果に基づく成果に関する概要である。

(1) 語学力について

- ・「英語で自己紹介ができる」、「英語で外国人に話しかけることができる」の問いに対し、それぞれ「とても思う」「少し思う」が15%増加した。セ

ミナーを通じて英語の使用および外国人との対応に対して抵抗感がなくなったことがうかがえる。

- ・「将来、外国の学校に行きたい」の問いに対しては「とても思う」が15%から69%に増加し、「将来、外国の会社で働きたい」の問いに対しては、15%から38%に増加した。留学や海外進学への希望は大幅に増加したと考えられるが、就職へのハードルは高いと考えられ、今後実際に行動する際には更なるフォローが必要である。

(2) コミュニケーション能力について

- ・「だれにでも話しかけることができる」の問いについて、「とても思う」が15%から54%に増加した。多様な人々とのオンラインでの交流の中で「話しかける」ことの必要性を理解し、実践することができたと考えられる。
- ・「人の話をきちんと聞くことができる」「人のために何かをしてあげるのが好きだ」「人の心の痛みがわかる」の問いについては、「とても思う」の割合の増加が見える。

(3) 主体性・積極性について

- ・「前むきに物事を考えられる」の問いについては、「とても思う」の回答が増加した。
- ・特に「先を見通して、自分で計画が立てられる」の問いに対する回答から、同世代の参加者や大学生から影響を受けることで、主体的にかつ計画的に行動しようとする意識が高まったと言える。

(4) チャレンジ精神について

- ・割合には差があるものの、すべての項目で「とても思う」の割合が増加した。
- ・特に「新しいことに挑戦したい」の問いに対して「とても思う」が92%に増加し、プログラムを通じて見出した目標に対して、意欲的に取り組もうとする意識が高まったと言える。

(5) 協調性・柔軟性について

- ・すべての項目において意識の高まりが見える。

- ・特に「誰とでも仲良くできる」の項目では「とても思う」が31%から46%に増加し、4日間のオンラインプログラムという制限の中で、多様性を受け入れ、自分とは異なる価値観を持つ人たちとの関係づくりがさらにできるようになったと言える。

(6) 責任感・使命感について

- ・全ての項目で微増ではあるが、意識の高まりが見える。
- ・元々責任感や使命感の高いメンバーが多かったが、同世代との関わりの中で、自分の役割を意識し、それを自ら進んで行うことは一般社会においても必要なことであり、短期間のプログラムであるがその意識が少し高まったといえる。

(7) 異文化理解について

- ・「交流国の文化（日常生活等）を理解している」、「交流国の歴史を理解している」との問いに積極的回答が増加しており、海外大学生との交流を通して理解がより深まったと考えられるが、時差の関係で、午前中のセミナーのみでの交流であったため、例年よりも上昇率は停滞した。
- ・「初めての環境に自分からなじもうと努力する」の問いについて、「とても思う」の回答の割合が減少した。ウィンタースクールに参加しようとした際の、意欲の高さが反映したものとも考えられる。

(8) 日本人としてのアイデンティティについて

- ・「日本の文化を説明できる」の問いについて、「あまり思わない」の割合が増加した。海外大学生との交流を通じて、あらためて日本の文化を知り、相手に説明できるようになることの重要性を認識した結果ではないかと考えられる。
- ・「日本の歴史を説明できる」の問いについても、「あまり思わない」という回答の割合が高く、今回のプログラムを通して異文化、歴史の知識を深めるきっかけになることを期待したい。
- ・上記(7)の項目とも関連づけながら、日本や各国の背景等を学ぶことができる

取組についても今後、プログラムに取り入れる必要があるものとする。

(9) 外向き志向について

- ・「日本人として世界に貢献したい」、「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい」、「交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい」の積極的的回答は微増しており、プログラムを通じての交流が、外向き志向を育むことにつながっていると考えられる。
- ・特に「交流した外国の人と将来も繋がりをもちたい」の肯定的回答は事前・事後ともに100%であった。

(10) 地域との関わりについて

- ・上記アンケートとは別に、プログラムを終えて、「小布施町にいきたいと思いましたか」の問いに対する回答が100%であり、「小布施町の人と交流できる機会に興味はありますか」の問いに対しても、積極的な回答が100%であった。
- ・小布施町の印象について、「こんなことをしたら面白くなりそうということを実行しやすい町。魅力がすでにたくさんあって、それを生かしたまちづくりがされている印象」「田舎にある町だけれど、特別な人たちがいるため、魅力的な印象を持った。」という声が上がリ、移住したいとの声も見られた。オンラインプログラムながら、町の文化や歴史、取組だけでなく「人」という魅力も伝わったと言える。
- ・「自分の地元についてどれくらい知っていますか」の問いに対しての肯定的な回答は低かったのに対し、「自分の地元についてより知ったり、関わりたいと思いましたか」の問いに対する積極的な回答は高かった。プログラムに参加し小布施について学ぶことを通じて、自分の地元への興味関心も大幅に高まったと言える。

5. 参加高校生の声

運営大学生が事後に高校生にとってアンケートから抜粋した。

Q. ウィンタースクール全体を通して自分が最も成長したと思う点はどこですか。

- ・行動することの恥ずかしさが減って、チャレンジすることが出来た。
- ・物事について、一つの面からではなく色々な人の話を聞いてから自分の考えを深められるようになったこと。
- ・自分の伝えたいと思うことを言語化する能力がすごい上がったと思う。
- ・自分と外の世界（社会）を切り離さずに考えることができるようになった点。
- ・自分の好きなところを見つけることができ、自分の興味があるところが増えた。過去から自分がどんな人か考えることができた。
- ・物の見方や視野を広げることができた点。自分の人生を振り返って、客観的に見て後悔していた部分までも良い後悔だと捉えられるようになった点。
- ・人の意見や考えを尊重できるようになった。
- ・自分の軸でわくわくすると感じたものに従おうと思うようになった点。
- ・自分だけではなく人の話も聞いて、誰かのことを真剣に考えたこと。
- ・将来の大切さを思い知れた。

Q. 全体を通して良かった点はどこですか。

- ・自分と年齢もバックグラウンドも違う人達と話し合っ、悩んだり共有したりしたところ。
- ・自分が伝えたいことを大学生メンターのみんなが引き出してきて、伝えることの大切さ、言語化する難しさを学ぶことができてよかった。
- ・否定しないで受け入れあえる雰囲気。
- ・本当にいろいろ刺激された。刺激されただけで止まらずこれから自分がどうするべきなのかまで考えさせてくれた。
- ・メンターさんと一対一で話す機会もあれば、グループで話したり高校生同士で話すこともあり、本当に様々な話ができたとです。
- ・とにかく自分や他の人について沢山話して語り合えて、自分を見つめ直せたこと。
- ・大学生のフォローが丁寧で、勇気を出して行動を起こしやすい環境だった点。
- ・すごいいろんな人と出会って新しい友達に会えた。

6. 高校生の意欲向上に向けた取り組み

(1) 高校生の学問への関心や意欲の促進

- ・大学生が実際に自分の大学で学んでいるこ

とを高校生に紹介し、大学で学ぶことや学問領域のリアリティを持ってもらうとともに、その面白さに触れ、学問への関心や意欲向上を図った。

- ・自分が希望する進路を実現するために、具体的な学習計画のデザインをサポートした。
- ・海外の大学の授業を疑似体験するセミナーを設けることで、学問の多様性や面白さに触れてもらった。
- ・理系・文系を問わず様々な分野で学んでいる大学生が運営を行い、高校生の身近なロールモデルとしての役割を果たすよう研修した。

(2) 英語に対する不安や懸念の払拭

- ・セミナーは海外大学生が中心となり運営され、楽しみながら英語を使ってみたり、英語だけではないコミュニケーション方法のとり方にも触れることで、異なる背景を持った者とのコミュニケーションに対する不安を払拭するような企画を用意した。
- ・英語を用いたアウトプット企画を多く用意し、「ツール」として英語を用いるという感覚を掴んでもらえるよう工夫した。

(3) キャリアや自己に対する理解の促進

- ・毎日の「リフレクション」を通し、高校生自身が内省する時間を設け、自己表現に欠かせない自己理解に繋げることができた。
- ・「自己分析ワークショップ1,2」などの企画を通じて、自分自身に対する理解を深める時間を多く用意した。
- ・様々な分野で活躍される社会人の講演（フォーラム）やより近い距離で社会人の話を聞く「フリーインタラクティブ」を企画し、多様なキャリアに触れられる場が提供できた。

(4) 主体性の促進

- ・プログラム中に行われた企画は、全て参加者が主体的に取り組めるような双方向なものとした。セミナーでは海外大学生と授業内容に関して話し合いができるように工夫されており、リフレクションも高校生が自己開示しやすいような環境づくりを運営大学生が心がけた。

(5) 海外留学のハードルを下げる

- ・セミナーを実施し、海外大学生を身近に感じられる機会を提供した。

- ・海外大学生のみならず、留学経験のある国内大学生が身近な前例として、自らの留学体験などを紹介した。

7. 成果のまとめと今後の課題

(1) 成果（ウィンタースクールでの参与観察及び事前・事後アンケートの結果から）

- ① 日を追うごとに、積極的に他の参加者やメンター役の大学生に話しかける姿や、フォーラムの際に躊躇せず質問をする姿が見られた。また、セミナーの際に英語で質問したり意見を述べたり、英語でのコミュニケーションに対する意識の向上が見られた。そのうえで、大学生や講師から、具体的な経験に基づく進路選択の話聞くことにより、自分自身のやりたいことを明確化し、主体的な進路選択を行おうとする意識を高めることができた。また、海外の大学への進学意識・留学に対する意識も高まった。
- ② フォーラム講師の講演を聞くことや、期間中のリフレクションの時間で、海外の大学生も含め、お互いの日々の生活や進路についての考えを話し合い、伝え合うことにより、それぞれの参加者の地域における価値観や課題を知ることができた。そのうえで、自分の可能性を広げ、外国の日本人として世界に貢献したいという考えに育成につながった。
- ③ 異なる人種・国籍・居住地・学校など、それぞれに異なる背景をもつ高校生、大学生及び社会人講師と関わりをもつ中で、多様な価値観を肌で感じ、自分の環境を相対化したり、他者に対する想像力を持つ大切さを参加者が実感することができた。そのうえで、高校生が多様な他者との交流の中から、それぞれに抱える課題を見出すことができ、閉会式では高校生一人ひとりが「自分がこれから取り組むこと」をスピーチすることで、具体的な行動へ向け決意を持つことができた。
- ④ 本プログラムは高校生の学びをメインとしたものではあるが、参加した大学生についても、運営を通じて人間的に成長した姿が見られ、指導者としての自覚に基づくロールモデルとしての役割を果たそうとする意識の向上が見られた。

- ⑤ 2013年から同様の取組を継続してきた結果、小布施町や周辺地域への還元が進んできている。

(2) 課題及び改善に向けた方策

① 高校生に対する効果の継続的モニタリング

本プログラムにより「英語力の向上や国際交流への心理的障壁が下がる」という短期的な効果は見込まれた。一方で、教育プログラムとしては、今後の高校生の進路も継続的にモニタリングし、本プログラムの間接的なインパクトも定量的に把握する必要がある。参加者が集う場として小布施町を活用しながら、定期的に参加者が戻ってくる環境を整備することで、進路や留学に関する活動などの支援を継続したい。

② 参加大学生の属性の多様化

今年度は首都圏の大学に所属する大学生が大半を占め、長野県から参加した高校生にとっては属性や経験が似ている大学生を見つけにくい面があった。多様性を確保しながら、長野県出身や長野県内の大学に通っている大学生の人数を増やすことで、長野県の高校生にとって運営大学生が身近な存在に感じさせる必要がある。

③ より幅広い県内高校への広報活動

参加生徒が各校で、体験したことを発表する機会は得ているが、参加をしたことによる自分の変容や、その後のアクションについて、その成果を伝える場面が事後報告会だけでは不十分である。また①のモニタリングの場を活用し、参加者同士の連携活動などを促す取り組みや、長野県教育委員会が主催する「長野県高校生『私のプロジェクト』発表大会」などの発表の機会へ積極的に参加しながら、全県の高校生に向けて広報活動を行う必要がある。

以上

〈主催〉

長野県教育委員会

〈共催〉

長野県上高井郡小布施町

一般社団法人 HLAB